

薩摩と伊能忠敬

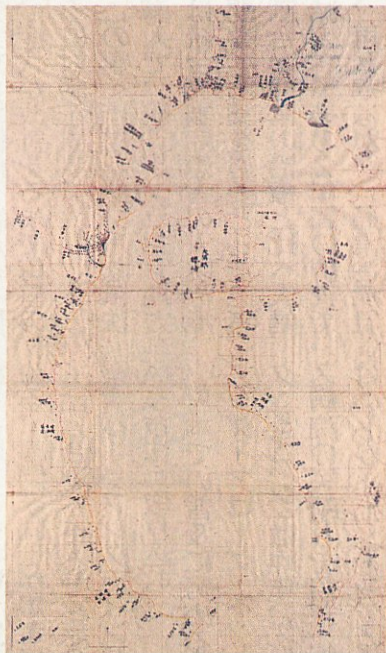
鹿児島市中央公民館で講演
県立博物館別館で古地図展

鹿児島大学名誉教授

岩松 暉

いわまつ・あきら氏 1938年新潟県長岡市生まれ。東京大学大学院理学系研究科地質学専門課程修了。76年、鹿児島大学理学部赴任。2004年、名誉教授。専門は災害地質学。

2度も来訪、離島まで測量



伊能忠敬の手掛けた地図に描かれた鹿児島湾。中央に桜島が浮かぶ

(米国議会図書館蔵)



伊能忠敬の肖像
(伊能忠敬記念館蔵、部分)

伊能忠敬は、教科書に登場する幕末有名人の一人である。50歳で隠居後、31歳の幕府天文方高橋至時に師事。天文・測量を学び、17年かけて日本全国を測量した。これにより、初めて日本列島の正確な姿が明らかになった。精度は世界的水準に達していたという。

10回におよぶ測量行のうち、薩摩藩には一番日数をかけ、2度も来ている。離島があつたからである。伊能が来たのは文化年間、島

津斉興の時代だが、島津家文書のうち斉興譜は焼失したらしく、測量の様子はよく分からない。幸い種子島家文書に記録が残る。それによれば、2隊に分かれて測量したらしいが、1隊8人の測量隊に島津家役人59人、種子島家役人71人が同行したという。上様(斉興)の体面を汚さないよう種子島家はかなり気を使つたらしい。

明治以降の書物には、外様大名の島津家は自藩の測量など快く思わなかつたに違いないが、厚遇したのは意外だと書かれている。しかし、時の将軍家斉の御台所は島津重豪の娘茂姫で、将軍家とは親密な間柄であつたし、明時館(天文館)を設立した重豪は、測量の意義を十分理解していたからこそ、厚遇したのであろう。後日譚がある。薩英戦争

かごしま
文化を語る

◇6月3日に伊能忠敬没後200年・測量の日記念講演会を鹿児島市中央公民館で開く。講演は「伊能忠敬とその業績」星埜由尚元国土地理院長▽「伊能忠敬の種子島屋久島測量について」鮫嶋安豊・鉄砲館参与▽「薩摩藩の天文・測量技術について」松尾千歳・尚古集成館館長▽「忘れられた島津斉興の時代」原口泉・志学館大学教授▽「薩英戦争と英国海軍による日本沿岸の海図作成」八島邦夫・元海上保安庁海洋情報部長。併せて古地図展を3～24日、同市の県立博物館別館(宝山ホール4階)で開く。

に伊能図が使われた可能性が高いのである。1862年に生麦事件が発生、翌63年8月に賠償を求めて英国艦隊が侵攻してきたのが薩英戦争だ。実は3カ月前の5月に英国海軍海図「日本」が大改訂されている。鹿児島湾のような奥深い湾内に侵入するには海図は不可欠だから、それに備えてシーボルトの地図や幕府から入手した「伊能小図」を基に急ぎよ編集したのであろう。

また、西南戦争の時にも伊能中図が活用された。伊能図に陸地の地形概略を追加すると共に、道路を朱書して記入し、官軍の薩軍追撃に利用したという。

薩摩は伊能の測量に協力したのに、皮肉にも攻められる際には利用されたことになる。